

れに、水門にはまりぬ、今はそゝるともひやかすともいへり、そゝりは言塵集に、そゝりとは子をいだきあげて、そゝりくといふは、此こゝろなり、俗にいさましくすゝむことをもそゝると云、今昔物語に、幼き兒のそゝりといふことするやうにして云々とあり、ひやかしは、悪る口きゝなどして、興をさますなり、さますとは、口ものを冷すことにいへば、やがて冷かすと云たりとみゆ、或人云、むかし山谷にはすきかへしの紙を製する者多く、それが方言に、紙のたねを水に漬おき、そのひやくる迄に廊中のにぎはひを見物して歸るより出たる詞といへり、いかがあらん、

〔異本洞房語園下〕吉原にて、歴々の客人を、だいじんと云、世話の浮世雙紙に、大盡と書たるものあり、是は卒に作りたるもの也、並木壽見齋と云ひし老人は、大人と書べしといひき、又余○莊勝富が師村井一露齋とて、元祿の初、九十餘歳にて終りし、此一露齋のいはれしは、大人と書くならば、逆ものことに、大の字をすみて、たいじんといたし、○此間恐有脱字此邑には、めづらしき堅やなり、やりて、ぎう共杯が、ものいひに、漢吳の差別にも及ぶべからず、

〔骨董集 上編中〕浮世袋再考

遊女にたはるゝを、浮世ぐるひといひしは、慶安明暦元祿の比までもしかありし歟、吾吟我集慶安二年未得著序の文に、あき人のよき衣著て、うき世ぐるひの小歌すきをいは、雪佛の水遊びしたらんが如し云々と見えたり、

新續犬筑波 七夕 つまむかふ舟路はうき世ぐるひかな

正信

俳諧絲屑元祿七年印本戀之部に、憂世狂、憂世名といふ名目を出せり、是等をもて證とすべし、なほ案るに、昔はすべて當世様をさして浮世といひしなるべし、

〔嬉遊笑覽九姐妓〕諸藝太平記、總じて此里のならひ、晝一ツ夜一ツと二ツに割て、大夫を三十七夕ツ